

一生の長さを思ふ3／4読み終へし『チェ・ゲバラ
伝』 佐佐木頼綱

チェ・ゲバラは一九二八年生、六七年没だから、満三十九年の一生だった。三十代を生きる作者にとつては、ゲバラの一生の時間と作者の現在までの時間がほぼ重なる。だからここは、「一生の長さ」をゲバラの一生の長さとしていいのかもしれない。が、歌としては、「一生の長さ」という大きなくくりが、実は各人々々の全く個別的な長さであることに気づかされる、そんなかたちの方が広がりがあっただろう。

ものの角みなとれてゐる雪の朝鞆あしたが青菜のネットを
つつく 鳥山順子

雪国ではない地域の雪の朝の、なんとなくうきうきするような非日常の感じがうまく出ている。さり気ない下句が、うまい。

勝手に広がる宇宙のことを想ったら今日は頑張らなくてもいいや
海老原愛

膨張宇宙論を、気軽に日常に抱き込むことで、ユーモラスな歌に仕上げた気合いはなかなか。下句の、しゃべり言葉をあえて採用しての軽さが、いい。

全身より血の気引きしが二度ありき三度目はいつく
るにやあらむ 坂口弘

「選歌ルーム」の宇都宮さんの文章にあるように、私たちにはとうてい理解の届かない死刑囚としての日々をすごす作者。一首前の「きさらぎは厄の月なれば常にも

短歌の現在

No.434

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

増し山なすかさ科に苛まれけり」と、この作の関係を想像するばかりである。

夜の空に雲うすく透きいつとなく形変へつつ移るひ
浮けり 岡田恵美子

「透く」「変ふ」「移る」「浮く」という微妙なニュアンスの動詞を四つも用いて、わずかな変化、かすかな動きを表現した。大きな変化や動きに目を奪われがちな現代社会のなかで、短歌ならではの微弱な世界とみている。

ぎんいろの浮雲のうへ円き目の白鷺三羽あをき脚を
垂る 経塚朋子

美術館に展示されている絵、あるいは画集等の絵をうたっているらしいことが、読者にすつとわかるように表現されている点が特色。うまいと思う。「円き目」がポイントだろうか。

永遠とこに治らぬ愛の火傷を携へしまま車谷長吉この世
を去りき 野々宮雪

一昨年、二〇一五年五月に他界した小説家・車谷長吉とその妻・高橋順子をうたう一連中の一首。久々に車谷長吉氏の名前を見て、つい選んでしまった。詩人の高橋順子さんとは今でもときどき会うが、車谷氏とはただ一度だけ二人きり渋谷で飲んだことがあった。一緒にテレビに出演、その帰りだったと思う。まだ結婚するまえだったはず。一度だけ会って、なんとなくよくおぼえている。人生のそんな関係についてつい思ってしまった。

パッサージュカキ際の岸辺を魂がトランク提げて行くの